

長浜曳山まつりの曳山行事は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。曳山は全部で13基あり、そのうち歌舞伎狂言を上演する曳山は12基。毎年4基ずつ登場し、3年ごとに出番を迎える



祭礼を通じた生涯教育の

仕組みを受け継ぐ

report

「子ども歌舞伎」保存継承の取り組み／

長浜曳山文化協会



長浜曳山文化協会の小池充さん。曳山まつりを運営する山組のひとつ田町組の若衆相談役。曳山まつりで振付・太夫・三味線の三役を担う人材を養成する三役修業塾の塾生として三味線も演奏する



長浜市曳山博物館副館長の中島誠一さん。これまで学芸員を務める傍ら、滋賀県の民俗芸能、祭礼などに関する論文や図録、報告書を多数発表している

少子高齢化や過疎化が進むなかまつりを支える人の裾野を広げる

湖国が桜爛漫となる4月、滋賀県の長浜八幡宮で行われる「長浜曳山まつり」は、秀吉が長浜城主の頃から400年余り続く伝統の祭りだ。見所は「動く美術館」と呼ばれる曳山の巡行と、その舞台で華やかな衣装の男児たちが演じる「子ども歌舞伎」である。

「長浜を発展させてきた町衆の経済力と、それによって培われた美意識や芸能文化が背景にあります」と話すのは長浜市曳山博物館副館長の中島誠一さんだ。

曳山を出す町の組織は「山組」と呼ばれる。子ども役者は山組から5〜12歳の男子が選ばれ、春休みを迎える3月後半から約2週間、本番に向けた稽古に入る。

「初めは女形を恥ずかしがる子どももいますが、朝から晩まで稽古を続けるうち徐々に役に入り込んでいきます。大人よりも柔軟性が高く覚えも早い」と説明するのは、長浜曳山文化協会の小池充さん。子どもたちの世話やまつりの実務的な運営を担うのが18歳から45歳までの「若衆」で、小池さん自身も山組の若衆相談役を務めている。その上の世代は「中老」と呼ばれ、まつり全体の予算管理や支援に携わる。こうして各世代が役割を担って交流し、支え合うことで地域社会への参加意識や連帯感、生まれ育った町への感謝



動く歌舞伎座と言われる曳山の舞台。例年4月14~16日に長浜八幡宮から御旅所神前までの市内各所の路上で「子ども歌舞伎」が上演される



本番近い4月9日からは仮衣装をまどって、通し稽古が一般公開される。休憩中には子どもたちの笑顔がこぼれる

3月下旬から、子ども役者たちは町家や稽古宿に設けた仮舞台で、読み習いから、所作を習う立ち稽古に朝から晩まで励む



4月13日、曳山に飾る御幣を長浜八幡宮へ迎えに行く儀式。御幣持ちと呼ばれる子どもが御幣を授かる



曳山博物館内には4基の曳山が収蔵。2基が常時公開されている



「長浜曳山文化協会」
問い合わせ先

〒526-0059
滋賀県長浜市元浜町14-8
TEL:0749-65-3300
FAX:0749-65-3440
<http://www.nagahama-hikiyama.or.jp/>

10~40代くらいまでの人々で構成される山組の組織「若衆」。まつりに出演する子どもの選出から大道具、小道具の準備に至るまで、献身的に役者の子どもたちの世話をする



の気持ち醸成されてきた。

「よく長浜の子は礼儀正しいと言われます。小さい頃から大人と活発に交流をしていますから社会的なルールも自ずと身につくんですね」と小池さん。大人になってからもまつりを通じて学ぶことは多く、生涯教育の役割も担っているという。

少子高齢化や曳山を持つ中心市街地の過疎化で、まつりの保存・伝承とそのため後継者育成が、以前にまして課題となっている。子ども歌舞伎に不可欠な振付・太夫・三味線の三役や囃子方は、これまで周辺地域や遠方から担い手を招き入れていたが高齢化で人材不足に。そこで「囃子保存会」で地域の子どもたちを中心に後継者育成を進めているほか、山組以外の市民を対象を広げて「三役」を育成する「三役修業塾」を通じて、まつりを支える人々の裾野を広げる取り組みが続いている。その一環として長浜曳山文化協会では、地域の中学校と連携して、曳山まつりだけでなく、そこから派生した芸能文化についての体験学習などを通じて、より多くの子どもたちに曳山まつりの魅力を伝えている。

「しきたりを思い切って柔軟にする工夫も必要ですが、先人達がつくり上げたしきたりや伝統はできるだけ守りたい」と中島さんと小池さんは口を揃える。文化の伝統を守りつつ、時代の変化にも対応していきける活動のあり方を模索している。

(文責・CEL編集室)

CEL